動・植物

正体は？（2015.10.13　姫路より Y.F.）

庭に柿の木が一本ある。一般的に柿は実の生る年と生らない年が有り、特に今年は生り年で小枝に鈴生り、重さで枝が垂れ下がる。いつもは気にせずに通る事が出来るのに、今年は 1m 近く垂れ下がり、下を通る事が難しくなっている。日に日に実は大きくなり、枝が折れるのではないかと心配しているが、良くしたもので虫が食い、実を落とし自然に摘果してくれて、一日に 10 個以上は落す。もう一か月近くこの調子、中には熟柿になり落ちてくる。この頃は葉っぱも落ち、夕方掃除をしても、翌朝の庭は実と葉で色づく。2 年ほど前の同じ時期、落ちた柿が次の朝には無くなっていることに気が付いた。庭の自動感知式街灯が夜中に点灯したので、来客かとのぞいて見たが誰もいない、そんな事が数回続いてから、見かけない動物が落ちた柿を食べているではないか。田舎と言っても近くには民家も多数有り、野生の動物がいるとは思ってもいなかったのでビックリ！ならば捕まえてやろうと罠を仕掛け、一週間ほど待ったが一向に掛からない。（この罠は一度猫で試したことがあり、その時はうまくいった実績がある。）それならばと、棒を準備し待機、街灯が点灯したのを確認し飛び出すと、食べるのに一心不乱、地面をこするほどおなかが丸くパンパンになり、動きも鈍くなっている。敵も必至！ドスンドスンと逃げる時に音がする（嘘みたいな話）。追いつきそうになると直角方向へ曲がり、又追っかけ近づくと又直角方向へ方向転換、結局逃げられてしまった。やっぱりタヌキだったと思ったのですが薄暗い中、走りながらの状態でハッキリ断定するのが難しい。後で色々人の話を聞き判断するとアライグマではなかったのか？今年も姿は見ないが、落ちた柿が無くなっているところを見ると、いまだに元気でいるらしい。

東京駅に舞う蝶（ヤマトシジミ）（2015.7.21 堺より T.I.）

東京駅に蝶々が飛んでいるのを御存知でしょうか。駅構内を人混みに紛れて飛んでいるわけではありませんが、周辺緑地帯はもとより、駅前街路樹の根本に生えた雑草の花に止まっているものも発見できます。それもそのはず、この蝶・ヤマトシジミは何処にでも生えている雑草・カタバミを食べて育つのですから・・・。そんな何処にでもいる蝶ですが、低いところを飛び回り、止まっても翅を閉じていることが多く、地味で目に付き難いようです。しかし、開いた翅が陽光に輝くと、光沢があってとても綺麗です。先日、東京駅構内に迷い込んできた蝶を偶然発見し、時間の許す限り周辺地区を探し回りましたので、汗だくになって会議に出席することになってしまいましたが、お陰様で帰路・車中のビールはとても美味でした。（写真左は食草・カタバミに止まる雄、右上は雌、右下は裏面、なお写真は東京駅周辺で撮影したものではありません）

竹水（2015.4.20 堺より R.I.）

竹水（ちくすい）ってご存知ですか？ 4 月～5 月の薫風の季節、若竹は一晩で約 1 メートル近くも伸び、一気に成長します。その時に地下茎から幹を通って吸い上げる水が竹の節に溜まる。これが竹水です。年間でもこの時期だけの現象で、溜まっても 20 日前後で無くなってしまうそうです。若竹の中で濾過された竹水は、生命力溢れる「神水」として昔から珍重され、薬や肥料などにも使われてきました。竹水中の天然アミノ酸含有量を調べた表によると、天然

保湿因子 NMF の主成分とされる多様なアミノ酸、保湿効果を有する糖類、抗酸化作用を有するポリフェノール類、肌の健康維持を助けるビタミン B 群などを含んでいるようです。機会があり、勧められて一口飲んでみましたが・・・、竹の香りがして、甘く感じました。この時期、切りたての竹の節をゆすると「チャプチャプ」と音がするかもしれません。

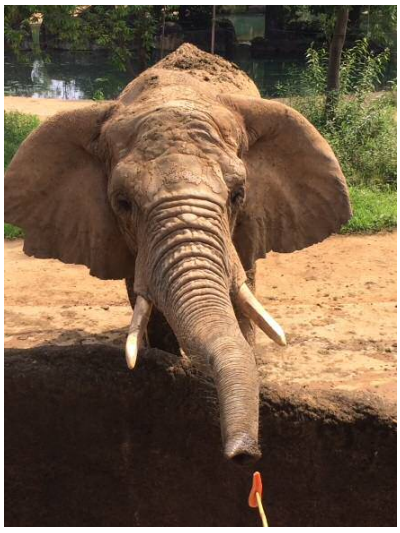
ツヅレサセコオロギ（2014.11.20 堺より T.I.）

ツヅレサセコオロギ（綴刺蟋蟀）・・・変な名前ですが、南大阪地域では初秋から初冬にかけて家屋周辺で普通に見られ、単にコオロギとも呼ばれています。「綴る」は「破れたりしたところをつぎ合わせる」意味で、「肩刺せ裾刺せ綴れ刺せ・・・もうすぐ冬が来るから着物の修繕はできていますか？」と知らせて鳴いているので名付けられたといわれています。この虫の鳴く音は単調で「ギリー、ギリー、ギリー・・・」という濁った音の繰り返しですが、他の虫がいなくなった晩秋・初冬には、この虫の声だけが、何故かとても寂しく響きます。子供の頃、真夜中に冷たい風が窓を叩くなか、勝手口の横にあった風呂釜の焚き口で鳴くツヅレサセコオロギの声は、♪母さんが夜なべをして手袋編んでくれた～♪ の歌と同じような感を受け、一人聞き入ったものです。今日から明日に日付が変わる頃、この虫の声を聞きながら、ウイスキー・グラスを傾けたいものです。（画像左が雄、右が雌）

木の葉隠れの術（2014.11.20　堺より T.I.）

蝶々は綺麗だから好き、でも蛾は気持ち悪いので大嫌い。そうおっしゃらずに、この写真を見て下さい。これが蛾に見えますでしょうか。翅（昆虫のはね）を広げて飛び立つと普通の蛾の姿になりますが、止まっていると、とても蛾とは思えないでしょう。この蛾は、ヤガ科のエグリバと申します。この画像は夜、門灯にやって来たものですが、林の中では忍者顔負けの隠遁の術（木の葉隠れの術）を使っていて、なかなか見つけられません。というわけで、どこにでも居るわりに、知らない人も多いようです。実物は、この画像よりも、もっと芸術的な美しさ？を感じます。幸運にも彼らに出会えたら、ぜひ観察してみて下さい。「彼ら」と申しますのは、エグリバには何種類かの仲間があり、それぞれに違う枯葉や枯草、枯枝の模様に化けて？いますので・・・。秋の夜長は、エグリバでも愛でながら「ひやおろし」で乾杯と参りましょう。（写真左は側面より、右は背面より撮影）

ちょっとした冒険（2014.9.2 仙台より M.T.）



今年の東北の夏はあっという間でした。夏らしい暑さというのはほんの 1 週間程度だったのではないでしょうか。長雨が続いたと思ったら気づけばもう秋の風。小さい子どものいる身にとっては外出しやすい絶好の季節です。先日は、仙台市の八木山動物公園へ出かけてきました。　子どもに人気の動物といえば…大人からすればゾウ、キリンにライオン、ゴリラ…なんて思いますが、うちの子たちが最近お熱なのはなぜかカバ！特に上の子は、カバを眺めて 1 時間なんてあっという間。そんなわけでカバのおやつタイムは絶対はずせません。今日も 1 番乗りで列に並びます。100 円玉を缶に入れて、おやつの人参 3 本を受け取って…あーんと大きな口を開けるカバに人参をポイッ。歯に触れるぐらいの近さです。大人気で大行列のゾウさんへのおやつタイムは、棒の先におやつをつけて…のスタイルでゾウさんが遠いこと

もあってか、2 人にとっては「オマケ」の扱いのようです。　さてさて、カバのおやつタイムを終えると、隣のサイの檻の前を通って出口に向かわなければいけません。これが子どもたちにとってはちょっとした冒険。なぜなら毎度のことのように「サイのおしっこ事件」を目にするから…！前述のようにカバの前に陣取っている時間が長いせいもあってか、必ずと言っていいほど、おしっこをかけられている人を目撃するんです。トラなどもそうですが、マーキングの意味もあるせいか、まるでスプレーのごとくかなりの勢いなんですね！通路一帯、壁までが濡れていることはしょっちゅう。もちろんサイは覗くだけにして、毎度毎度ダッシュで通過です。先日はとうとう「サイがおしりを向けたら注意」の看板に加えて、檻の前に透明なビニールシートが張られていました。これでひと安心…？と思いきや、なぜかちょっと残念そうな上の子…。でも確かに！危険（？）があるから、冒険って楽しいんだものね～と、「将来の夢は冒険家」と書いた子ども時代を懐かしく思い出した母なのでした。

鳥も省エネの時代（2013. 8.20 堺より T.I.）

猛禽類で最も速いのはハヤブサで、最も遅いのはトビですが、ハヤブサは絶滅危惧種であるのに対して、トビは個体数が多く、何処にでも居る鳥です。人との共存により大繁殖を成し遂げている「ずる賢い」カラスに似通った特徴があるとの指摘もありますが、トビの繁栄は、猛禽類中、もしかすると全ての鳥の中で最も「省エネ」であることに由来するのかもしれません。翼がほぼ同じ長さの他の猛禽と比較すると体重が半分以下で、鷹狩りで主に使われたオオタカは翼長がトビの 3/4 程度で体重がほぼ同じ、翼長がオオタカより少し短く、翼面積が小さいハヤブサの体重は、トビよりやや重いようです。飛翔に要するエネルギー量が少なく、大繁栄しているトビですが、飛翔している姿の美しさはハヤブサやオオタカに及ばないようです。人工物ではありますが、近年、大阪周辺も生物が住み易い環境が整えられつつあり、大阪湾沿岸にもハヤブサが、府下の古墳や公園でもオオタカの姿を見ることができます。小型の猛禽、チョウゲンボウやハイタカは、学内でもよく見かけるようになってきましたが、飛翔する時間帯が早朝に限定されているので、目撃した人は少ないようです。

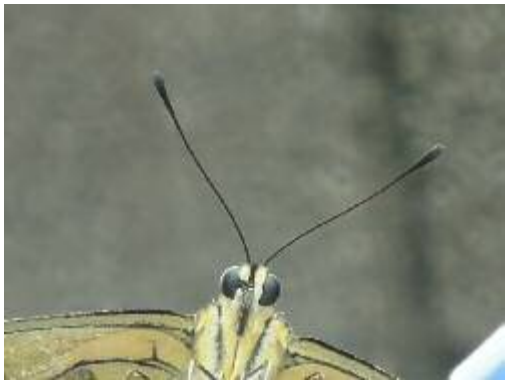
蜘蛛を襲う蜂（2013.4.22 堺より T.I.）

写真の蜂は「フタモンベッコウ」、日本最大のベッコウバチで、襲われているのは体長 3 ㎝ 程度の「オニグモ」、本州では大型の蜘蛛です。ベッコウバチの仲間は大阪府立大学構内にも生息、肉食性の蜘蛛を捕獲して幼虫に食べさせる狩人蜂で、虫の食物連鎖では頂点に立ち、この蜂が生息している自然環境は豊で、生物多様性が保たれていると言われています。しかし近年、複数のベッコウバチが一匹の蜘蛛を取り合っている場面をよく見かけるようになりました。この蜂の数は、親世代が狩をしていた時点における蜘蛛の数に依存し、蜘蛛よりも遙かに少なくなければなりませんが、蜘蛛の個体数変動があまりにも激しく、対応できなくなっているのだと思われます。詳しいことは解りませんが、蜘蛛の移動、営巣時期における天候が毎年違うようになってきているのかもしれません。ベッコウバチも蜘蛛も食べてみたいとは思いませんが、蜂の子（クロスズメバチの幼虫）は美味です。蜂の子を炒って、アルザス地方・ゲベルツトラミネール種の白ワインを合わせてみては如何でしょうか。

綾部山梅林（2013.4.10 兵庫より M.A.）

春を感じに行ってきました。兵庫県立大学書写キャンパスから南西 20 キロ程の、たつの市御津町黒崎にある綾部山梅林です。訪れたのは 3 月の初めで残念ながら満開には少し早く、まだまだ肌寒い日でしたが、沢山の方が観梅に来られていました。綾部山梅林園には梅と古墳が共生する梅園で園内には 16 基の古墳があります。 昭和 43 年土地改良付帯事業として国有林 23.9 ヘクタールを開墾し、梅を植え付けられています。満開時には大層に綺麗だろうと思い浮かべながら散策しました。梅林の南には瀬戸内の海が広がります。見晴らし台からの梅越しに見る穏やかで、きらきらと光る海との景色は絶景で、小豆島や家島群島、淡路島が臨めます。6 月上旬の梅の収穫時期には、梅ちぎり体験もあるそうです。今年は我が家の梅干し用にその頃、又、行ってみましょうかね。

虫の顔（2012.12.20 堺より T.I.）



虫の顔を見たことがありますか？　虫それぞれ、とても個性的な顔をしています。面白い？顔としては、ミツカドコオロギなどもありますが、蝿にしても、蚊にしても、バッタにしても、とても個性的な顔をしています。食べるものの違いで、口、眼、触覚から顔つき、体型まで全く変わってしまうので、哺乳類である人間と鳥類・・・爬虫類・両生類以上の違いがあるのも当然です。今回紹介するのは蝶の顔で、キアゲハ・夏型・雌です。真正面からの撮影ですので、ストローを巻いたような口は見えませんが、とても可愛く写っていると思われませんか。蝶の場合、異性を選択する権利は全て雌にありますが、彼女は産卵を間近に控えて大きなお腹をしていましたので、良い雄に巡り会えたのでしょう。しかし、キアゲハは農業上重要な害虫で、家庭菜園でも、パセリやニンジンが被害に遭っています。なぜか複雑な気持になってしまいました。こんな夜には、優しさと温もりを感じる、ボルドー・マルゴー村の赤ワインを抜くことにします。

蝶の渡り（2012.10.29 堺より T.I.）

9 月末から 10 月はじめにかけて、愛知県・伊良湖岬や和歌山県・日の岬には「鷹の渡り」を目的に多くの野鳥観察者が訪れています。伊良湖コースを辿る鷹は幼鳥で、成鳥は好き勝手に移動しているらしいので、運が良ければ、大阪府立大学構内でも見ることができます。同じ頃、低山の樹林帯では、数え切れない程のアサギマダラが翅（昆虫のはね）を休めています。堺近傍では、南大阪の外側を取り巻く和泉山脈で、この蝶の大群を普通に見ることができます。よく目立つ、たいへん美しい蝶ですが、毒を持っており、捕食者がいませんので、ふわふわと風に乗って飛びます。日本で見られる大型蝶の中では、飛翔速度は群を抜いて遅いのですが、遠くは東北地方から沖縄や台湾までの長距離を移動し、また来年、戻って来ます。全く「風まかせの旅」ですので、無事に到着できる蝶は少ないと思いますが、この種の個体数は維持されているようです。今宵は彼らの無事を祈って、彼らの到着地点が誇る銘酒・泡盛で乾杯と参りましょう。（写真はアサギマダラの雄）

染井吉野（2012.4.20　堺より T.Y.）

　大阪府立大学から四方をぐるりと展望すると、西には大阪湾、東から南にかけて生駒山脈から和泉山脈と山々が連なっています。丁度生駒と和泉の境に石川が流れ北の淀川と石川沿いは地形が低くなっているのに気がつきます。大阪湾から吹く風は石川沿いを通り奈良県側に向かって吹き抜けてゆきます。この方向の風は真夏時に吹くことがおおく、風沿いの街々は時として大阪の”汚れた空気“の通り道となり光化学スモッグが発生しやすい場所となります。大阪や堺よりも松原、藤井寺などが遥かに光化学スモッグの発生頻度が高い理由は地形にありそうです。　和泉山脈の北端に頂上が二つに分かれた山があり、二上山と称されています。古代より石器の産地として有名であり近年は砥石の産地としても名を馳せています。この二上山の麓に”寒牡丹”と”石仏”で有名な石光寺（http://sekkouji.or.jp/）というお寺があり、11 月から 2 月まで寒牡丹を愛でる人が絶えません。この石光寺、もう一つ有名なものが有ります。その昔、中将姫が蓮糸で紡いだ糸を染め、染めた糸を干したと伝えられる「糸かけ桜」と、染めた糸を洗ったという「染め井」と呼ばれる井戸が境内に残っています。現在「糸かけ桜」の看板が掛かっている桜はソメイヨシノ（http://someiyosino.com/）と思えるのですが、ほんの僅かの糸を掛けただけで撓みそうな枝振り見て、“これが「糸かけ桜」？”と思える光景が見られます。桜の木の寿命は 100 年と言われているので「糸かけ桜」の末裔かもしれません。機会があれば是非訪れて欲しい名刹の一つです。（写真は大阪府立大学構内です）

堺発：野生の王国（2011.6.23　Y.M.）

　大阪オフィスの所在する大阪府立大学中百舌鳥キャンパスは広大である。HP によると面積は 47ha で、200 種以上の樹木、約 40 種の野鳥、40 種以上のチョウ、約 20 種のトンボが見られるとのこと、ちょっとした野生の王国である。近所に南海高野線の白鷺駅があることとの関連は不明だが、キャンパス内でアオサギをよく見かけたりする。以前夜のキャンパス内で野生動物との出会いがあった。上の写真を見ていただきたい。犬や猫とは異なるずんぐりとしたプロポーション、アライグマのようにも見えたが、短い尻尾にはアライグマ特有の縞模様が確認できない。あるいはタヌキだろうか？以前北海道で野生のキタキツネは見たことあるが、大阪に野生のタヌキ？謎の生物は慌ててカメラを構える私を尻目に夜の側溝へと消えていった。残念ながらこの生物との再会は今のところ叶っていない。